

讚美歌 355 主を仰ぎみれば
マタイ福音書 5章1～10節

讚美歌 260 千歳の岩よ、わが身を囲め

(高橋 三郎訳)

- 1 イエスは群衆を見て山に登られた。そして座につかされると、弟子たちがみもとに近づいてきた。
- 2 そこで彼は口を開き、彼らに教えて言われた。
 - 3 幸いなるかな、心の貧しい人たち、
天国は彼らのものである。
 - 4 幸いなるかな、悲しんでいる人たち、
彼らは慰められるであろう。
 - 5 幸いなるかな、柔和な人たち、
彼らは地を継ぐであろう。
 - 6 幸いなるかな、義に飢え渴いている人たち、
彼らは満たされであろう。
 - 7 幸いなるかな、憐れみ深い人たち、
彼らは憐れみを受けるであろう。
 - 8 幸いなるかな、心の清い人たち、
彼らは神を見るであろう。
 - 9 幸いなるかな、平和を作り出す人たち
彼らは神の子と呼ばれるであろう。
 - 10 幸いなるかな、義のために迫害されてきた人たち、
天国は彼らのものである。

1 伊藤 邦幸 『無垢の心をこがれ求める』

『山猿庵縁起』 1979年9月 (『山猿庵』読書会の始まりにあたって読書録に記したが公表せず⇒口頭で一部を)

・パスカルの賭 (かけ) : 神あり50% 神なし50% (一休: とんち問答)

「神あり」と賭けて生活すれば → われらの生活は愛と誠実と義に富むもの 福祉豊かなものであろう。

⇒「天国あり」と賭けて生活すれば! 「天国における生」「天国において何を望むか?」 真剣に模索できる!

・神様から「お前は天国において何を望むか?」問われたら: 死別した愛する者との再会が自然の情に適っている。

・ところで、天国において 如何なる年齢を望むか?

・天国で何をすることを期待するか?

安らかに眠って居たくない! 来たるべき世において、永遠の午睡や永遠の休憩は 私の夢でない

医師は失業! 天国に愛の業を必要とするほど困窮せる人が居ない。この世の限りの業!

⇒ 医学 医術以外の学びを 地上で準備しておく

「今宵の僅かなる学びも虚しからじ」と賭ける。⇒ 「死して後 已まざらむ」ことを期する。

・「至福共働」(幸福の至上境地): 『幸福論』三谷隆正 (1943年11月)

幸福の真諦は見ることではなく、働くことである。享樂することではなくて、創造することである。

幸福の至上境は「至福直感」ではなく、身親しく神と共なる「至福共働」であるに相違ない。

天国は終了と静止の国ではなくて、さかんなる建設と澁刺たる生動の国でなければならぬ。(藤井武: 活動の生活)

・「天国における生」を考えると、私たちは一聯の断絶としての忘却—ユウノエの河を渡ること—の必要性を認めるけれども、他面においてはこの世の持続性を求める。永遠の命とか個性の完成とか愛の成就とか謂うのは、すべてこの連続性を求める心の表れである。私たちは現実の今こゝにおける日々の営みの彼方にしか 天国での生活の内実を構想しえない。そこで、私は天国においても、この世において最も愛した、最もやりたかったことで、為し能わなかったことを期待し希求するの他はない。そして私にとって、それは「哲学の学習」において他にはない。⇒喜悦としての読書

・私達の先輩たちが、天国と云い来世信仰を語るけれども、来生々活の内容については、殆ど何も語っていない。

この世における未来をすら知る力を持たぬ人間が 来世をも知りえないのは当然とも思える。

しかし、来世について真剣に考えることなしに、残り少ない地上の生を全うできようとは、私には信じがたい。

2. 内村鑑三 『続・一日一生』 武藤陽一 内村の信仰：きわめて来世的！ 多くの来世観を記した！

1861年生、1891、不敬事件、妻・加寿子死、1904～日露戦争、1907、父死、1912、ルツ子死、1913『所感十年』
1917、アメリカ参戦 ⇒キリスト再臨信仰 1922～24、ガリラヤの道 1925～26、十字架の道 1930年、召天

3月26日 ロマ書8・10～11

キリストは復活したもうた。しかし復活は彼に限るのではない。彼の生命のあるところにはまた復活があるのである。「もしイエスをよみがえらしし者の霊、なんじらに住まば、キリストを死よりよみがえらしし者は、そのなんじらに住むところの霊をもて、なんじらが死ぬべき身体をも生かすべし」とある。よって知る、キリストの復活のさまはわが復活のさまなることを。われ、彼を信じ、彼と共に苦しみを受けなば、また彼と共に栄えを受けて、彼のごとくに復活するのである（ロマ書八・17）。信者は単に霊的に永遠に生くるのではない。体的にも生くるのである。彼の来世における生命は今世における生命の連続である。ただし後者における敗壞はないのである。彼は死なざる体をもって永遠に生くるのである。かくて彼は来世において、今世において持ちし性格を持続するのである。十字架につけられし釘の痕（あと）は、キリストに残りしように彼にも残るのである。そうしてこれ彼にとりて、大なる名誉の傷痕である。彼はこれをもって天使の前に誇るのである。

(信13・256 われらは来世について、いくばく示されしか？ 1916年)

3月31日 コリント第一書 7・29～31

来世によってこの世のすべての苦痛が慰めらる。すべての不幸艱難、しかり、死そのものまでが完全に慰めらる。

この世限りと思うがゆえに、人生に不平が多く、堪えがたき、もだえがあるのである。されども確実なる来世の希望の前に不平煩悶は消えて跡なしである。人は能率増進の必要を説くが、来世の希望ほど能率を増すものはない。口に賛美歌が絶えずして、仕事は常にはかどるのである。人の過失（あやまち）はたやすくゆるすことができ、身の不幸は希望の輝きの前に消散す。もしすべての人に堅き来世の希望があるならば、社会問題は直ちに絶え、平和は世界にみなぎるのである。
(信13・253 来世の能力 1929年)

12月29日 ヘブル書11・13～16

そうして信仰の進歩と共に今世はますます軽くなりて来世はますます重くなるのであります。身は今なお幕のこなたに留まりますが、心はすでにかなたに移りて、その栄光を感じるのであります。そうしてかなたに厚くなればなるほど、こなたに薄くなるのであります。この栄光の国の、わがために備えられしを知りて、私どもはこの世の欲望（のぞみ）が日々薄らいで来るのであります。そうして耳にかすかにその音楽を聞き、眼にかすかにその輝きを望みて、私どもの心は飛び立つのであります。しかり、幕一枚であります。そうしてすべての誘惑（こころみ）は終わるのであります。すべての涙はぬぐわれるのであります。イエスを面前（めのあたり）拝しまつるのであります。愛する者に再会するのであります。すべての疑問が解けるのであります。すべての誤解が氷解するのであります。そうして新しき自由の生涯に入るのであります。人は人生が短いとて歎きますが、クリスチャンはその長からざるを感謝するのであります。栄光の国は今や目前に横たわるのであります。喜びてもなお喜ぶべきではありませんか。

(信13・264 今世 対 来世 1916年)

2月21日 テサロニケ第2 2・16～17

そうして永遠の来世が確実になるに至りまして、価値のない今世に真個（ほんとう）の価値がついて来るのであります。まず第一に、私どもは世をいとわなくなるのであります。この世の苦痛は来世の希望をもって慰め得て余りあるのであります。今世はまた来世に入るの準備の場所として最上の価値を有するに至ります。そのもの自身のためには何の価値もないこの世は、来世（つぎのよ）と相関連して、必要欠くべからざるものとなるのであります。日々の生計（なりわい）の業のごとき、そのもの自身のためには心思を勞するほどの価値なきように思われますが、しかし、これによって来世獲得の道が開かるるを知って、小事が小事でなくなるのであります。まことに来世の存在の根底を置かずして今世は全然無意味であります。しかしながら一たびこれを握るの特権を賦与せられまして、この無意味の今世が意味深長のものとなるのであります。
(信13・264 今世 対 来世 1916年)

世には来世を知るの必要はないと言う人があります。かかる人が今やキリスト信者と称せらるる人の中さえ多いということは実に驚き入った次第であります。いわゆる現世的宗教は宗教ではありません。来世を明らかにするがゆえに。宗教はことに人生に必要なるのであります。ことにこの事を明らかにするがゆえに、キリスト教はことに必要となるのであります。

キリスト、死を滅ぼし、福音をもて、（永遠の）生命と朽ちざる事を明らかにせり（テモテ後 1・10）とあります。キリストによりて来世は明らかになったのであります。彼によりて、私ども、彼の弟子たちは、今この世にありてなお希望の内に私どもの戦いを続けているのであります。しかもキリストは決して私どもより遠く離れていません。ただ幕一枚であります。彼は幕のかなたにありて、私どもの祈禱を聞き、いと近き援助（たすけ）としていましたもうのであります。私は今日この歡喜（よろこび）を、この地において、私の愛する兄弟姉妹と分かつことのできるのを神に感謝いたします。

11月14日 マタイ福音書25・21

天国は休息所ではなくて活動場(はたらきば)である。「なんじの主人の休息に入れよ」といいたまわずして、「なんじの主人の喜びに入れよ」といいたまう。神の喜びは、人を助け導く喜びである。信者はキリストの国に入りて、この清き喜びに入るのである。愛の働きが無窮におこなわれる所、そこが天国である。そしてこの世において善く働きし報賞として、父と共に永久に働く愛の国に移さるるというのである。うるわしきものにしてキリスト教の天国観のごときはない。なまけ者の行く所にあらず。活動家の行く所である。さらに大なる責任をにないて神と人とのために働く所である。(注15・235 マタイ伝25・14～30 タラントのたとえ話『十字架の道』1926年)

12月30日 テモテ第2 4・6～8 「信者の生涯の結実」

信者の生涯は、始めは悪くして終わりは善くある。終わりに近づくほど、ますます善くある。生命(いのち)の夕暮になればなるほど、彼は何ものか、彼の心の奥深き所に結実しつつあるを感じず。人あり、彼に、その生涯の中に最も愉快なりし時はいつか? と聞くならば、彼は常に今なりと答うるのである。そうして彼の最後(ラスト)が最善(ベスト)である。あたかも年末のクリスマスが、彼にとり最も喜ばしき期(とき)であるように、彼の生涯の終わりが、彼にとり最も感謝多き時である。そうして彼が特別に感謝してやまざる事は、彼の生涯の計画がことごとく失敗であって、彼の計画に反せし神の御計画が彼の身において成ったことである。「このゆえに、われ、弱きと凌辱(はずかしめ)と空乏と迫害と艱難(なやみ)に会うを楽しみとせり」(コリント後12・10)。信者にはこんな感謝があるのである。(信8・60 最善の最後 所感 1917)

『一日一生』12月28日 コリント第1 10・13

われは時々、夜半独(ひと)り静かに双手を我が胸に当てて言う、我もし今死するならば、我は平和に死につくを得(う)べきかと。しかしてかく独(ひと)り己に問うて、我はいまだかつて一回も満足なる答をうる能はざりき。されども主は我に教えて言いたもう、何故に死について思いわずらうや、汝は今死するにあらず、故に死に勝つの力はいまだ汝に与えられざるなり、明日のことを思いわずらうなかれ。明日は明日のことを思いわずらえ。一日の苦老は一日にて足れり。汝の力は汝の日の数にしたがわん。汝が死する時にあたって、死に勝つの力は汝に加えられるべしと。よって知る、死に就(つ)くの準備の、忠実に今日の職に従事することなるを、我は死を恐るるを要せず、我もまた主の恩恵(めぐみ)によりて平康(やすき)をもって死につくを得(う)べし。

たとい我れ死の蔭の谷を歩むとも禍害(わざわい)を恐れじ、汝、我と共に在せばなり。[詩編23篇4節]

(死に勝つの力 1913年10月)

『一日一生』10月16日 ヨブ記33・27～30

信者は自身で劃然(かくぜん)と彼の死期を定めることはできない。・・・しかしながら彼は神は愛なりと信ずる。彼は彼の神が、死すべき時に彼をして死なしめたもうことを信ず。すなわち恩恵(めぐみ)の手のうちに導かれ来たりし彼は、死すべき時ならでは死せず、また彼の死する時は彼の死すべき時であることを信ず。神に寄り頼む彼は、万事を彼に任(まか)し奉るのである。まして人生の最大事たる死においておや。彼の生涯の指導において誤(あやま)りたまわざりし彼の神は、彼の生涯の最大事件なる死の時期をえらぶにおいて、決して誤りたまわないのである。

(死すべき時 1914年2月)

すべて善し

他人は知らず、信者にとりては、少なくとも余一人にとりては、かつて在(あ)りし事はすべてことごとく在る必要のありし事である。悲哀(かなしみ)も歡喜(よろこび)も、病も健康も、損失も利得も、失敗も成功も、敵も味方も、死も生も、身に臨(きた)りし事はすべてことごとく、臨る必要のありし事である。その一を欠いて、余は今日あるを得なかつたのである。神に導かれし余の生涯は、全部、彼の御計画によりておこなわれし生涯であった。…余に臨みし神のすべての恩恵を総計して、余は余の生涯の終わりにおいて言うであろう、「万事万物、一として善からざるはなし」と。(1920年5月 59歳 『所感』19・286)

- : 内村が召天前に「万歳、感謝、満足、希望、進歩、正義、すべての善き事」と感謝した讚美に重なる告白
⇒ 宇宙万物人生ことごとく可なり。…人類の幸福と日本国の隆盛と宇宙完成を祈る。1930年3月

3. 私の願う「天国における生」

- ・ 天国にある恩師・友たちに 怖れつつも 感謝して願うこと :
神様、イエスと共に 心の底まで 見られていること ⇒「墓場のかげ より見ているよ」(伊藤邦幸)
同時に 神様 イエス様と共に この地上での我々の歩み 社会全体の苦悩 個別的にも、社会全体についても、執り成しの祈り捧げてくださっているにちがいない！
御霊ご自身も「呻きつつ」救いへと執り成して下さっている！
復活されたイエス： 今も喜ぶ者と共に喜び 悲しむ者と共に悲しんでくださっている。
⇒「日々がイースター！」(溝口 正)
- ・ 万民救済の希望:最期に、復活したイエス・キリストが立てる十字架の御前に、皆がひれ伏すにちがいない！(溝口正)
- ・ 「天国における生」を考える時、
自分自身が清められた よき性格が 自然に供えられることを 神様に感謝しつつ、神の御業を讃美しつつ、あわせて、召された後 地上で生活している 親しき家族、友のために、この社会全体の、地上では及びえなかった 悲惨 苦難に対して、イエスの復活の命に与った者として 執り成しの祈り 小さき者ではあるが 具体的に、神様、イエス・キリストと共なる働きをしたい。「至福共働」の業に関わらせて頂きたい。活動の生活をしたい。
- ・ マタイ福音書 5章1~10節 山上の垂訓 幸いなるな！ :
この世の日々の営み ⇒天国に 連続して、発展して つながること
天国にあつて完成されることを望む ことである が
なお「地上においても祝福の源泉であることに変わりはない。求めようと思えば手に入れることができる。
ただ私たちはそれらのものを、真剣に求めようとしていない。」⇒「真実」「よき性格」を求めるものでありたい！

4. 千歳の岩よ、わが身を囲め！ 内村鑑三の愛唱歌

内村鑑三が ロマ書7章を講義した最後に語った言葉 (石原兵永が記録、1921年12月11日)

然し、私が最後の日に神の前に出る時には、私はどうして立ち得るか。
私のなした僅かな伝道、事業、私の努力、そんなものは何にもならぬ。私は何によって神の前に立つか。
我が主イエス・キリストを 我が義として 前に立てて、私はその蔭に かくれるのである！

○ 三谷 隆正：『知識・信仰・道徳』 私の来世観

罪の苦悩より私を救いあげたまいし者が、私をしてかくのごとくに来世を待望せしませたまう。ずいぶん得手勝手な夢を見ている！と言って私を嘲笑う人もあるであろう。そうかも知れない。しかし私はこの私の夢を棄てることができない。しかりこれは私にとっては夢以上のものである。時として私はむしろこの現世の生の余りにも夢のごとくして、むなしきに耐え得なくなる。空の空なるかな、すべて空なりである。実際この人生は空なのではあるまいか！うらぶる身を寒雨蕭条たる荒野にただひとり立つおもいである。しかしその時私の来世観が私を救ってくれる。個性と真実が限りなく尊重せらるる愛の国、しかしておどろくべき嘉賞の国、そこに本来われらの国籍がある。私は亡国の棄民ではないのである。人生は空の空はないのである。

悪魔はあらゆるものをけなし、さげすみ、あざわらう。…しかし神はけなしたまわない。決してあざ笑いたまわず、さげすみたまわない。天にいますわれらの父は、かぎりなき嘉賞 appreciation の霊である。ものみなを讃美して、それを活かすところの愛である。…われらのいと小さき者の一だに決してさげすまれないであろう。われらのはかなき行歩といえども、決して無意味に遺棄せらるることがないであろう。父なる神はわれらのいと小さき生活の断片をも活かしてみこころのままに用いたまうであろう。かくてわれらのいのちはけつしてあだには死なされぬであろう。おどるべき嘉賞の秋が、天においてわれらのいと小さき者を待っているであろう。かくて事々に栄光神にありて世々限りなからんがために。

(1941年11月 太平洋戦争突入した年

暗雲全地に乱れ飛ぶ今日、最も大切なものは光であると思う。まことの光であると思う。そうしてこの光は、信仰を通してのほか得ること難しである。この信仰というものの本質に関し、多少の解明を寄与したいというのが本書の著者の念願である。)